



## 第81回

「なっちゃん」 今しばらく走る

※2024年12月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘していただきます。

マイクを握れば、行く先々で声援が飛ぶ。人気は衰え知らずだが、今度ばかりは「なっちゃん」の願いも届かなかった。公明党元代表の山口那津男常任顧問である。2024年10月の衆院選で、党は連立を組む自民党の派閥裏金問題へのあおりを受けて惨敗。15年務めた代表を退き、やっと肩の荷が下りたと思いきや、大ピンチに。やっぱり、気は休まらない？

国会議事堂前のイチヨウ並木が色づき始めた24年11月、私（記者）は参院議院会館の事務所を訪ねた。紺のスーツに、勝負カラーの一つ、ブルーのネクタイ姿。柔らかな表情で迎えてくれた。

気になっていたことがあった。

「『同じ穴のムジナ』とは見られ

たくないです」。まだ、代表だった23年12月のこと。自民党の派閥裏金問題について、公明党が動画投稿アプリ「TikTok（ティックトック）」で配信した動画内で、こう発言したのだ。物腰柔らかな振る舞いから想像できない過激な言葉は以外に感じた。

言葉の裏には、政権交代の悪夢があった。09年の衆院選で麻生太郎政権は惨敗し、民主党政権が誕生。公明党も当時の太田昭宏代表や北側一雄幹事長ら、小選挙区に立候補した8人全員が落選。比例得票数も、05年衆院選から総数が増加した中で党は10・30%減らした。

「自民党に批判が集まっていたが、結果的に我が党もあおりを受

けた。理不尽で、あの二の舞いはゴメンだ、ということだね」。発言時は岸田文雄政権で、衆院解散・総選挙が取り沙汰されていた。

「政治とカネ」の問題で、政権の一役を担う公明党に非が全くないとは言わないが、事の発端は自民党。不特定多数が視聴する媒体を意識して発信し、「もらい事故」の再来を避けたい思惑があったようだ。

選挙期間中、応援演説で全国各地を駆け回った。代表のバトンを受けた石井啓一氏は、比例代表から小選挙区に転出して選挙区から身動きが取れなかった。「政党にとって選挙は最大の勝負どころ」。総力戦だったが、結果はご承知の通り。

挑戦した11小選挙区で獲得は4議席。比例代表は20議席を確保したが、告示前の32議席を下回った。公明党は、自民党が派閥裏金事件に関係したとして非公認にしたり、比例代表との重複立候補を認めなかった候補者に推薦を出した

りした。代表を交代した後のことであり、それを知ったのは、党機関紙の公明新聞紙上だった。驚いたという。

「（敗因は）自民党のせいと言う人もいるけど、我が身を省みることも必要でしょう。あれほど、同じ穴のムジナに見られたくない、と言ったのに！」と悔しげ。対応は失敗で、敗因と断言する。1時間半の取材で唯一、口調が強まったのはこの時だった。無念さがにじみ出ていた。

代表までの歩みは山あり谷あり。中選挙区制時代の1999年に衆院選で初当選した後、分党した新進党に参加。小選挙区制になった96年から連続落選を味わった。その後、参院にくら替えし、01年の選挙で政界復帰を果たした。

白羽の矢が当てられ、09年に代表に就任した時は野党だった。「ゼロからというより、マイナスからの出発。経験のないことばかりで、一日一日が必死だった」

先の衆院選は、「同じ穴のムジナ」と見られてしまったゆえの結果だろう。自民党との連携を見直す考えはないのか、訪ねてみた。

「選挙の票の出方には、いろんな波がある。だが、国民生活に責任を持つ政権政党の重い責任がある。それは、自公政権が軸というのが、30年になる政治生活の結論ですね」と言い切る。

街頭に立てば、演説冒頭「なっちゃんですよー」と声を張り上げる。70歳も過ぎ、気恥ずかしさがないわけではないという。「だけど、男性からも「なっちゃん」と声がかかる。コミュニケーションが取れて、良いことだと思っている」。やめるつもりはない。

公明党は24年、結党60年を迎えた。衆院選、参院選、東京都議選を「3大選挙」と位置づけ、勝利が至上命題。「疲れたとか言っている場合ではない。『大衆とともに闘う』」。立覚精神を胸に、今しほびく走り続ける。